

まえがき

西田龍雄

周知のように西夏国(1032-1227)は、中国の西北地域いわゆるシルクロードの東端を占める要処に建国され、仏教国として約二百年の間繁栄した。1908年にロシアのコズロフ探検隊は故城黒水城(ハラホト)から多量の西夏国の文物を発掘した。黒水城は有名な敦煌から直線距離にして350kmほど東方の地点にある。1900年に敦煌莫高窟17洞(藏経洞)で発見された敦煌文書は、多くの学者の研究を経て敦煌学という学問分野を樹立し、百年の間に宝探しの段階から全体を体系化するに至るまですばらしい成果を納めた。2000年には敦煌藏経洞発見百周年を記念する会議が盛大に挙行された、と聞いている。西夏文物の研究は敦煌研究に比べてずい分と遅れて発進したが、いつの間にか西夏学とよばれるようになり、近年は研究者の数も急速に増加していて盛況をみせ、目立った成果も挙がっている。それにも拘らずなお宝探しの段階を大きく越えることなく、十分体系づけられるまでにはなお時間が必要なように思える。

黒水城出土文物は、スタイン収集品をも含めて、そのもの全体が西夏の文化を代表しているといつてよい程、質量共に充実した見事なものである。最初に注目された西夏文字は一見すると偏旁冠などの組合せから単なる漢字の模倣に過ぎないような印象を与えたけれども、実際には独自の構想のもとに多くの創意工夫が施されていて、漢字よりも格段に優れた組織と機能をもつ表意文字であったと、私は考えている。

そしてその文字を公布した事業(1036)は、実際には西夏語という新しい書写語(国語)を創り出し、それを適切に表記するために考案した書記体系の公表であったと理解するべきであろう。それまでに書いてきた漢文や藏文に替る新しい国語の創造は並大抵の事業ではなかった。その完成にこそ大きな拍手を送るべき

であろうと、近年私は主張している。

西夏国を構成したミ族、ミニャク族など(平夏部・東山部など)諸部族の口語を土台にして、その国語西夏語は創り出された。私はそれらの口語を総括してタングート語(党項語)とよびたいが、それらは蔵緬(チベット・ビルマ)語派に属する言語であったに違いなく、西夏語もまた蔵緬語を基本骨格とする言語構造を具えていた。しかし、文字の背後に記録された西夏語は均質的な一つの体系をもった言語であったとは言い難い。種々の部族語の形態を取り入れた混合した面をもっていた。それを表記する西夏文字もまた部族語の形式を平等に表記できるように配慮されていたのである。初代皇帝李元昊の時代に開始した仏典や中国古典の翻訳を通して、西夏語は次第に推敲されて表現力豊かな書き言葉として成長していった。それが相当に進展した段階に到達した時期をまって、法華経は翻訳されたのである。西夏文法華経は西夏語研究にとって第一級の資料であると言い得る。私はその研究を通して西夏語・西夏文字に関する多くの新しい知識を学びとることができた。しかし、まだまだ未知の面をこの資料は豊富に秘蔵している。

西夏国は蔵伝仏教と中国仏教の合流地域であった。一つの法会において西夏文経典が蔵文経典と漢文経典と共に朗誦されたことを示唆する記載がある。蔵伝仏教は元朝以降にチベットにおいて整えられたと考えられているが、実質的にはそれ以前に吐蕃から逃れた高僧たちが、西夏国内で活動しその基盤を固めていたのではないだろうか。蔵伝仏教の各宗派を代表する主要経典はすべて現存する西夏仏典の中に揃っているように思える。

全く偶然のことではあるが、西夏語研究の出発点となったモリスの『西夏の文字と言語の研究に対する初歩的寄与』が刊行されて(1904)、今年でちょうど百年を迎える。期せずしてこの節目に本書が出版されることの意義は大きく、奇縁と言わざるを得ない。本書の刊行が今後の西夏研究の促進に一つの寄与となることを心から願っている。

最後に、本書の共同出版に当り、多大なご支援をたまわったロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルク支部のユーリー・ペトロシヤン、エヴゲーニイ・クチャーノフ、イリーナ・ポポワの歴代所長ならびに創価学会の池田大作名誉会長、秋谷栄之助会長、そして東洋哲学研究所の森田康夫代表理事、川田洋一所長に衷心より感謝申しあげたい。また、同研究所の宮川美法、

水船教義、小槻晴明、市倉洋一の各氏の多年にわたるご協力と聖教新聞社の松岡承一カメラマンが精緻な写真を撮影してくださったことを、ここに記して感謝の意を表したい。さらに英文校正では、アンソニー・ジョージ氏のご協力をいただいた。心より御礼申しあげる。

(にしだ たつお／京都大学名誉教授)

(本稿は、2005年3月31日に出版された『西夏文「妙法蓮華経」——写真版
(鳩摩羅什訳対照)』の「まえがき」を転載したものです)